新宿御苑の庭園デザインと設計者アンリ・マルチネ

Garden Design and Designer Henri Martinet in Shinjuku Gyoen National Garden

牧 大次郎

Daijiro MAKI

株式会社プレック研究所

PREC Institute INC.

Key Words : 1. 新宿御苑 2. アンリ・マルチネ 3. フランス式庭園 4. エドアール・アンドレ

1. Shinjuku Gyoen National Garden 2. Henri Martinet 3. French Garden 4. Edourd André

1 はじめに

新宿御苑（東京都新宿区）は、フランスの造園家アンリ・マルチネ（Henri Martinet, 1867～1936）の設計図面をもとに大改修され、1906年に完成した皇室苑地（現・国民公園）であり、今年で開苑100周年を迎える。現在新宿御苑を所管している環境省は、100周年記念事業として「環境の杜構想」を打ち立て、環境という視点から積極的な施策展開を行っている。その中でも「歴史・文化遺産の継承」という観点で新宿御苑の歴史的価値に対する評価を行うため、『新宿御苑「環境の杜」庭園及び植物遺産の評価のための調査報告書』（2003年3月）が作成された。この報告書では、新宿御苑の庭園デザインの特徴を明らかにするためには、新宿御苑の計画を立案したフランス人造園家アンリ・マルチネの人物像を明確にすること、並びにマルチネの計画に関するフランスにおける資料収集などが今後の課題として挙げられている。

現在マルチネの設計図などの資料・記録は戦災で焼失し、彼の計画を描いた鳥瞰図が残るのみである。これにしても、戦前の出版物の中に掲載された2次資料である。また、新宿御苑に関する既往研究の中に、この人物に関する詳細な記録はなく、一般に、日本側責任者であった福羽逸人が設計を依頼したヴェルサイユ国立高等園芸学校の教授という紹介のされ方をしている。

そこで本研究は、マルチネの生まれ故郷であるフランス現地で調査を行い、新宿御苑の設計者アンリ・マルチネの人物像や業績、彼の造園デザインの特徴を明らか

にし、新宿御苑の庭園デザインの特徴を示唆することにより歴史的価値への評価を深化させることを目的とした。

2. アンリ・マルチネの経歴

マルチネの母校とされているヴェルサイユ国立高等園芸学校（現国立高等造園学校）にて、元校長であるAlain Durnerin氏と、エドアール・アンドレ（Edouard André, 1840～1911）の研究者であるStéphanie de Courtois氏に調査協力を依頼し、マルチネの経歴や業績、マルチネが新宿御苑の計画を依頼された経緯・計画立案当時の状況・福羽逸人との関係などを調査した。その結果明らかになった彼の主な経歴は以下のとおりである。

（表1参照）

マルチネは1867年2月9日にフランスのアゼール・リドー（Azay-le-Rideau）で誕生し、1936年1月3日に68歳で死去した。1883年（16歳）にヴェルサイユ国立高等園芸学校に若くして入学し、オーギュスト・ショワジー（Auguste Choisy）に設計製図教育を受けた。ショワジーは当時有名な建築家であり、1878年よりヴェルサイユで教鞭をとっており、新宿御苑の鳥瞰図にも用いられた独特の製図法による鳥瞰図法の発案者であった。

マルチネはヴェルサイユ国立高等園芸学校を入学・卒業ともに首席であった。それにより、1888年（21歳）には農務省からのイギリスのチェルシー庭園やキューガーデンへの実習生として選拔され派遣され、帰国後当時フランス造園界で中心的な存在であったエドアール・アン

西暦	年齢	出来事
1867	0	2月9日 アゼ・ル・リドー (Azay-le-Rideau) で誕生
1883	16	ヴェルサイユ国立高等園芸学校に入学し、建築家Auguste Choisyに設計製図教育を受ける
1886	19	ヴェルサイユ国立高等園芸学校を卒業
1888	21	フランス農務省より、イギリスのチェルシー (Chelsea) 庭園やキュー (Kew) ガーデンの実習生に選抜される エドアル・アンドレ (Edouard André) の代理として製図家となる
1890	23	アンドレの秘書となる アンドレのスケッチを元に、ブルガリアのバルナ (Varna) 公園の設計を監理する
1891	24	雑誌『ル・ジャルダン (Le Jardin)』の編集者となる 造園設計家として独立する
1892	25	アンリ・ニベット (Henri Nivet) と組んだ庭園計画家がトゥール (Tours) で金賞を受賞
1894	27	リヨン (Lyon) で行われた万国博覧会にて公園計画に対する銀賞に加え、庭園雑誌『ル・ジャルダン (Le Jardin)』が金賞を受賞
1895	28	1894年に行われたサント・ペテルスブルグ万国博覧会での功績として、チュニジア勲章である "Nicham" を受賞
1896	29	1894年に行われたサント・ペテルスブルグ万国博覧会での功績として、ロシアの勲章である "Saint-Stanislas" を受賞 ポー (Pau) のポーモン (Beaumont) 公園を設計 (~1900)
1897	30	ヴェルサイユ国立高等園芸学校の教授となり産業・商業園芸学を教える (~1903、名目上の教授は1920まで)
1900	33	SNHF (Societe Nationale d'Horticulture de France、フランス国立園芸協会) で福羽逸人と出会い、新宿御苑の改修設計を依頼される
1901	34	バレンシエンヌ (Valenciennes) のロネル (Rhonelle) 公園を設計
1903	36	ジョーベット (Jouvet) 公園の審査員となる
1904	37	農務省で造園設計のカウンセラーとなる
1905	38	ヴェルサイユ国立高等園芸学校同窓会会長 (~1906)
1910	43	フランス国立園芸協会の副会長となる (~1911)
1921	54	『ル・ジャルダン』と合併した『ル・ヴュ・オルティコル (Revue Horticole)』の共同編集人となる
1936	68	1月3日 死去

表 1. アンリ・マルチネの経歴

ドレの片腕として設計活動を行い、アンドレのスケッチをもとにバルナ公園 (Parc Varna) の設計監理 (1890) をするなど、アンドレの良き協力者であり彼の造園設計に多くを学んだようである。そして 1891 年 (24 歳) には既に造園設計家として独立し、トゥール (Tours) の公園の設計案 (1892) を手がけるなどの設計活動を始めた。また同時に、庭園雑誌『Le Jardin』の編集長 (1891~1921) を務めると共に、1897 年からはヴェルサイユ国立高等園芸学校教授 (1897~1903、名目上の教授は 1920 まで) として産業・商業園芸学を教えた。

この間、リヨンの万国博覧会で雑誌『Le Jardin』が金賞を受賞 (1894)、またフランス国内だけでなくチュニジア・ロシアなど海外各地で賞を受賞している。

さらにヴェルサイユ国立高等園芸学校同窓会会長 (1905~1906) や、1888 年から会員であったフランス国立園芸協会の副会長 (1910~1911) も務めるなど、同協会主催の様々な審査会の審査員を歴任し、1894 年のサント・ペテルスブルグ万国博覧会のフランス政府出展責

任者に就くなど、19 世紀末から 20 世紀初頭のフランス造園界を代表する人物の一人であった。

3. アンリ・マルチネのフランス造園界における位置づけ

アンリ・マルチネの師匠であったエドアル・アンドレは、パリ市の植物責任者 (1860~1863) となり、1864 年からはチーフガーデナーとしてアドルフ・アルファン (Jean-Charles-Adolph Alphand, 1817~1891) と共にビュット・ショーモン公園の建設を行った。アルファンは、ブローニュの森 (1852)、ヴァンセンヌの森 (1860)、モンソー公園 (1861)、ビュット・ショーモン公園 (1864)、モンスーリ公園 (1878) など、パリの公園整備の責任者として、当時フランスを代表する造園家であった。

(図 1 参照)

図 1. アンリ・マルチネを取り巻く人物相関図

アルファン、アンドレ、マルチネは共にヴェルサイユ国立高等園芸学校の教授であったことより、マルチネはアルファン、アンドレと続くフランスを代表する造園家の流れに位置づく人物であると考えられる。

マルチネに関する資料の中に新宿御苑の設計図面や鳥瞰図などの記録は残されていなかったが、新宿御苑との関係を記した記事があった。記事名は「日本の園芸 (L'Horticulture au Japon)」 (Le Jardin, 1902, p. 84) でマルチネが編集人となっている雑誌『Le Jardin』の中で紹介されていた。記事内容には、福羽との関係を友人と紹介し、その福羽に新宿御苑の計画・設計・見積りの作成を依頼されたと記述があり、新宿御苑はマルチネによって設計されたという事実関係の典拠といえる。しかし、新宿御苑が完成した以降、その評価等についての記述や、関連した記事は関連雑誌、文献、その後のマルチネの経歴書などに一切発見できなかった。

4. アンリ・マルチネの代表作品

(1) マルチネの代表的造園作品

アンリ・マルチネの主な造園作品を、現地における文献調査から、先にあげた彼の死亡記事と、フランス国立園芸協会刊の『公園・庭園設計の完成作品に関する批評、国立園芸協会年鑑』（1901）に記載されていた作品から整理した。（表2）

公園名（日本語）	公園名（フランス語）	場所	設計年代
ガンベッタ広場	square Gambetta	—	—
バストゥール広場	square Pasteur	—	—
ドデンヌ広場	square de la Dodenne	Valenciennes	1901
ボーモン公園	parc de Beaumont	Pau	1896
新宿御苑	—	新宿区	1900
ロネル公園	le parc de la Rhonelle	Valenciennes	1901
ビルブルー公園	parc de Villepreux	—	—
ボーリガール公園	parc de Beauregard	—	—
ボ・コナン公園	parc de Bot-Conan	Brittany	—
オスニー公園	parc de Osny	Pontoise	—

表2. アンリ・マルチネの主な代表作品

その記述から、特に評価の高い造園作品は、ボーリガール公園（parc de Beauregard、詳細不詳）、ボーモン公園（parc de Beaumont, Pau, 1896）、ロネル公園（le parc de la Rhonelle, Valenciennes, 1901）の3公園であったが、これらの公園について各種メディアを通じて現況を調査した結果、ボーリガール公園に関しては詳細不明であった。そこで、マルチネの代表的造園作品の現地調査としては、現在もその存在が確認されたロネル公園とボーモン公園とを対象として実施した。

(2) ボーモン公園

ボーモン公園は1869年フランス南西部、ピレネー山脈に対峙した保養都市ポー（Pau）の中心市街地に造園された12ha規模の中央公園的役割をもつ場所にある。主要建築であるパレス（現・カジノ）東側に主要庭園部分が広がりその中央にキオスクが位置している。元は個人の邸宅庭園であったため、当時の庭園の一部を残して設計され、その際直線園路とその並木は公園の園路として活用された。主要園地は段丘上に広がり、南に落ち込む斜面を含んで構成される。その他の主要構成要素は、曲線と直線の園路、起伏に富んだ芝生地、グロット状の滝、自然石を組んで斜面を落ちながら流れる水路、大きな池と橋などである。（図2、図3）

(3) ロネル公園

ロネル公園は、1901年フランス北部ノール県に位置するバレンシエンヌ（Valenciennes）において造園された

1.2haの都市公園である。市の中心部に位置し中央公園的意味をもっている。園の中央部分には街を流れる水路を巧みに取り込んで構成要素の一つとしている。当時は「Jardin（庭園）」とも呼ばれたようだが、その中心に位置するのは大池とその傍らのグロットの意匠を反映した岩山である。しかし、公園の景色を注意深く観察し、現地で得られた45点の古写真等を参照したところ、園に隣接した病院の建物を公園の風景要素として取り入れていることがわかった。全体的には曲線の園路、緩やかな起伏をもつ芝生地、視線をコントロールするように植栽された木立、コルベイク（花籠状花壇）などの特徴あるデザインを主体として構成されている。（図2、図4）

5. マルチネの造園作品の特徴と新宿御苑の造園デザイン

マルチネの現存する二つの代表的造園作品と、新宿御苑とに共通する造園デザインの特徴を簡略にまとめるなら、曲線園路を用いる風景式が基調であること、地形を活かして園内に緩やかな起伏を設けること。（写真1）

写真1. ロネル公園の曲線園路と緩やかな起伏

水景として、園内の中心に大池を配置してそこに小さな島を築き樹木（ポプラ）を植栽し、池畔にはグロット状の岩組みを設けること。（写真2）

写真2. ボーモン公園のグロット状の岩組

建築景として園の中心から外れて中心的建築要素（ロネル公園では園外の病院建築、ボーモン公園ではカジノ、新宿御苑では未完の宮殿）を扱うこと。（写真3）

写真3. ボーモン公園の宮殿（現カジノ）

園内を通る人工要素（ロネル公園では水路、ボーモン公園では南側の道路、新宿御苑では鉄道）を公園内の景として取り込むこと、などが挙げられる。（写真4）

写真4. 街を流れる水路を取り込む（ロネル公園）

そして、曲線園路やキオスクからのいくつかの通景線（ビスタ）を設け、それが注意深く植栽された木立の間を抜けたり、木立やコルベユ（花籠花壇）がビスタストップとなるような景色の構成をしている共通点も見出せる。（写真5）

写真5. ロネル公園のコルベユ（花籠花壇）

こうした彼の造園作品の特徴を見ていくと、そのデザイン原理が師であるアンドレの造園デザインの教科書『L'ART DES JARDINS』（1879）に記載される、景の構成要素の取り込み方に同じと判断される。（図2）この書の中で、アンドレは彼が提唱し実践した当時の造園デザイン様式を「style composite」（コンポジットスタイル、組合せ様式）、または「style mixe」（ミックススタイル、混合様式）」と呼び、以下のように解説する。

「組み合わせ、あるいは混合様式はある好ましい条件の下で、二つのものを正しい判断で組み合わせることで成果生まれる。それは、庭園芸術の将来のあり方であると思う。人工と自然、建築と風景との融合であり、その時代に適した庭のもっと良い組み合わせを生むこととなるだろう。すでに、かなり多くの試みが成功というより手探り状態のものが多く、わずかな例外を除いて二つの様式の調和というより、奇妙な取り合わせといった場合が多い。

建築学や幾何学の法則に従って造られた宮殿・城館の周囲や広大な庭園に囲まれた記念建造物が、徐々に遠ざかるにつれ自然な風景になっていくようなことが、将来造園家に試されることかもしれない。そのためには、どんな研究や予備知識が必要かを唱えてきた。建築の知識、技術者や造園家たちの仕事を知ること、一時的な流行のスタイルかどうかを見極める目を持つことが必要不可欠である。さらに、個々の好み、設計者の個性、客の無理な注文と戦いながら、適切な方向に導く能力が必要とされる。」

様々な要素の組み合わせ、ミックスされた様式は、まさに現代新宿御苑がその庭園様式として「フランス式整形庭園、イギリス式風景式庭園、日本式庭園からなる庭園ですが、設計された時代や設計者などから総合すると近代西洋庭園と考えられます。」と説明される特徴そのものとも言えよう。

以上のことから、アンリ・マルチネのデザインした新宿御苑の造園様式は、当時のフランスを代表する造園家エドアル・アンドレの提唱した「コンポジットスタイル（style composite）」をもつもので、またアンリ・マルチネの代表的造園作品とも言うべきものであろう。

このような庭園様式は、日本においても例をみない形であり、歴史的な価値も高いといえよう。

※『L'art des Jardins』目次より作成

■：ポニー公園で見られた構成要素 ▲：ロネル公園で見られた構成要素 ●：新宿御苑で見られた構成要素 ○：新宿御苑にその意匠が反映されたと考えられる構成要素

©ポーモン公園 (the park Beaumont. 1896)

図2. アンリ・マルチネの代表作品と新宿御苑の庭園デザイン

図 3

ボーモン公園（parc de Beaumont, Pau, 1896）のアンリ・マルチネによる鳥瞰図
中央左の建物はカジノ、右奥の園地に大池。園地の右より上下に見える筋は斜面を流れ落ちる細流。（Le Jardin 所収）

図 4

ロネル公園（le parc de la Rhonelle, Valenciennes, 1901）開園当初の写真絵葉書。池とグット状の岩山（コンクリート擬岩）。中央の建物は園外の病院。（ヴァレンシエンヌ図書館蔵）

写真 6 アンリ・マルチネ（Henri Martinet, 1906 鈴木誠所蔵写真）

参考文献

牧大次郎・鈴木誠・杉尾伸太郎
（2006）：新宿御苑の設計者アンリ・マルチネに関する考察、日本造園学会誌・ランドスケープ研究 69（5）、pp. 1-4、／鈴木誠編
（2005）：平成 16 年度新宿御苑庭園意匠検証調査業務、（株）プレック研究所／（財）自然環境研究センター編（2003）：新宿御苑「環境の杜」庭園及び植物遺産の評価のための調査報告書、同センター